

「全知は暗くなった」(22:44)とあります。それに続いて「太陽は光を失った」(23:45)とありますから、これは皆既日食が起こったに違いないと考えていろいろ調べる人もいるようですが、それはあまり意味がないでしょう。現代の私たちは、心の中の出来事と物理的現象を分けて考えるのは当然と思っていますが、古代の人たちは、そうではありませんでした。サタンの働きを「闇の力」と物理的に表現します。そしてその闇は、実際の真っ暗な夜と同一のものと考えていました。「全知が暗くなった」ということは、神様に敵対する闇の勢力がその本性を現したということです。ルカによる福音書ではサタンはイエスを荒野で誘惑したところから現れ、一時イエスを去ります。そのときは比較的小さな存在として登場していたのですが、その後イスカリオテのユダヤに入り込み、十字架が近づくにつれて勢力を拡大し、今や全知を覆ったのです。太陽の光線がどんなにまぶしく輝いても、そんなものはわけなく覆い隠してしまうほどの闇の力が、その本性を現したのです。私は、ナチスのホロコースト、アウシュビッツを思い出します。私たちの世界は人間や自然界を讃えるナイーブな樂觀主義を許さない超自然的な悪の脅かしの下にあるというのが聖書の世界観です。

次に「神殿の垂れ幕が真ん中から避けた」とあります。これは何を意味しているのでしょうか。これも本当にこんなことがあったのかどうかを学者たちは調べています。すると大体この時代に、神殿の柱が倒れたという事件が記録されていました。これは有名な事件だったようです。けれども柱と垂れ幕は違います。紀元100年ごろに書かれた「ナザレ人の福音書」というのがありまして、そこにはイエスが十字架に即けられた時に柱が倒れたと書かれていますが、これは、その有名な神殿石柱倒壊事件に合わせて書き直したと考えるべきでしょう。確かなこととして言えるのは、当初のキリスト者たちの間には、神殿の垂れ幕が裂けたという言い伝えがあったということです。良く聖書を見てみますと、「裂けた」ではな

く、「裂かれた」と受身形になっています。つまり誰か引き裂いた者があるということです。誰でしょうか？それについては語られていません。けれども、この神殿の垂れ幕がどのような機能を果たしていたのかを考えると、理解に役立つでしょう。それは神様とこの世界を隔てる幕でした。同時にそれは神様がこの世界におられるということの徴でもあります。つまり神殿の幕は、神様は見えないけれども確かにそこにおられて世界を守ってくださるということのシンボルだということです。どもたちは、どんな文化でも、「良いことをしなさい。そうすれば幸せになれるから。悪いことをしてはいけない。そうすればバチが当たるよ。なぜなら神さまは目に見えないけれどもちゃんと見ているから。」と教わります。因果応報の神という世界観です。けれども、その因果応報の神観が通用しない起こっています。イエスが無実の聖者だということは誰の目にも明らかであったにもかかわらず、彼を十字架につけるという流れの勢いを誰も押し留めることはできませんでした。そこには闇の勢力の支配があるのです。つまり、人間に都合のよい神という観念は、引き裂かれてしまったということです。

今日もう一つ注目したいことは、イエス様の元弟子たちが、遠巻きに見ていたという記述です。これもあまり気分の良い光景ではありません。聖書の中で「遠巻きに見る」という言葉を拾っていますと、皆一様に、親しかった人たちが近寄らなくなり冷ややかに見つめている場面ばかりです。ペトロがそうでした。イエスが捕まえられた時に彼は遠くから見ていたのです。詩編にはこういう言葉があります。「疫病にかかったわたしを／愛する者も友も避けて立ち／わたしに近い者も、遠く離れて立ちます」(詩編38:12)。「あなたはわたしから／親しい友を遠ざけられました。彼らにとってわたしは忌むべき者となりました。…愛する友も／あなたはわたしから遠ざけてしまわれました。今、わたしに親しいのは暗闇だけです」(詩編88:9,19)。ここには、苦しむ者の孤独が言い表されています。確

かにこちらを見ているのに、助けてくれない。とても恐ろしい光景ではないでしょうか。実際ここには女たちだけでなく、「イエスを知っていたすべての人たち」とあるように、家族、親せき、友人たちが皆、遠巻きにイエスを見ているのです。そして、そこには母マリアも含まれていたはずで、「今、わたしに親しいのは暗闇だけです。」とありました。誰にとって最も暗かったのか。それはイエス様にとってです。

闇の勢力は、物理的な闇を伴って、世界を埋め尽くし、人間に都合のよい神観が引き裂かれ、そしてその闇の真ん中に、闇によってひねりつぶされようとしているイエス様がいるのです。闇がイエス様を取り囲み、その円がだんだん狭まって、ろうそくのともし火のようにふっと消えてしまう。そんなイメージを私は持ちました。

けれども私は、この出来事がただ暗いだけの話とは思えません。いやじつのところ、明るく暖かみさすら感じるのです。それはこの言葉のせいです。「父よ、私の霊を御手にゆだねます。」因果応報ではない、とてつもなく理不尽なことをされる神、この神に信頼して自分の全身全霊を委ねますという信仰の表明です。自分の正しさを、自分の考えにも業にもよらず、完全に神さまにゆだねてしまうのです。イエス様にして信仰義認なのです。

「私の霊を御手にゆだねます。」これは詩編 31 篇の 6 節の言葉でもあります。ユダヤ人は、この詩編を就寝前に読むそうです。眠りにつくとは、死にたとえられます。私たちは日々死んで、朝の目覚めは新しい命が与えられるということです。パウロは自分が日々死んでいると言いました。彼が、今この瞬間を、死と背中合わせのこととして生きていたということに間違いはありません（ローマ 6:3 以下、7:3 以下 8:36, I コリント 2:9,15:31, II コリント 1:8-10,4:10-11,5:14-15,6:9,7:3,11:23,フィリピ 3:10）。ある人は、「幸せとは、今日一日しか命がないと思って生きることである。」と言いました。前回の説教で人はどのように死を迎えるのかと言うお話をしましたね。ひとは生きてきたように死ぬ。イエス様は、「わたしの霊を御手にゆだねます」と祈られ死なれました。とすれば、イエス

様も、今日一日だけの命と思って生きてこられ、日々に、瞬間瞬間に、「わたしの霊を御手にゆだねます」と祈っておられたということです。死を迎える祈りであるとともに、今ここを生きるための祈りでもあるのです。

イエス様がこの祈りを祈られたと言うことは、信仰の勝利です。色濃く押し寄せる闇の勢力は、イエス様からこの言葉だけは奪うことができませんでした。この言葉は一瞬にしてすべてを変えてしまいます。どんなに闇が迫っても、この闇に自分の力ではひとたまりもないことを知りつつも、自分の思った通りではないかもしれないけれども、神様に一切をお任せすることを宣言する言葉——信仰の勝利です。実際、この祈りには不思議な力があります。「わたしの霊を御手にゆだねます。」どんなつらい時でも慰められます。夜眠れないとき、羊を数えるより、効果があります。そして、そしてこの祈りは、それを耳にする者をも変える力もあります。ローマ兵百人隊長は、闇に勝つ平安の祈りに、心動かされました。見物に来た群衆は、胸を打ちながら帰路につきました。実際皆さん、自分の胸を、こう、こぶしで打ってみてください。胸にどうしようもない苦しみがあるとき人はこうします。人々は自分の心の中にある苦しみに気づくのです。自分の罪、闇の力による絶望…。根源的な闇…。その気づきは悔い改めにつながっていきます（使徒 2:41）。

闇の力に負けない、一挙に形勢逆転できる言葉。それが「わたしの霊を御手にゆだねます。」です。この祈りを口ずさんでいきましょう。日常の思い煩い…「あれもしよう、これもしなくっちゃあ。」「これで良かったかなあ。」「あれはまずかった。」「これはできるかなあ。無理、とてもできない、あきらめよう。」「ああ、またやっちゃった。自分はどうしてこうなんだろう。」「もう死んでもいい、早く死にたい。」…こうしたあらゆる思い煩いは、根源的な闇の力に結び付いています。サタンが、これだけは私たちの口を上らせないようにするために、全力で向かってくる場所の言葉——「神様、わたしの霊を御手にゆだねます。」私たちはこの言葉だけで生きていけるのです。そしてこの言葉だけで死んでも行けるのです。